

児島惟謙と大森貝塚

— 没後一〇〇年に寄せて —

徳田誠志

はじめに

関西大学博物館前の広場には、大きなクスノキが数本植えられている。時には新緑を輝かせ、時には木陰を作りだし、この木の下は学生の憩いの場となっている。このうち一本のクスノキの傍らにあまり大きくもなく、そして目立つこともないが一つの彫刻が置かれている。だれあるう本学の創設に関与した一人、児島惟謙（以下、小文では「児島翁」と敬意を込めて記述していきたい。）の胸像である（写真1）。今日どれほどの学生がこの姿に気づいているかは知らないが、この像は関西大学創立八〇周年を記念して建てられたものであり、この場所で

四〇年以上学生を見守ってきたことになる。

筆者も大学在学中には毎日のように博物館前にあるこの胸像を見ていたはずなのだが、先日改めてこの像をしげしげと眺めることとなった。その理由は、児島翁と考古学とのちよつとしたエピソードを発見し、一層の親近感が湧いたためである。

以下、平成二〇年が児島翁の没後一〇〇年にあたることから、翁と考古学の不思議な縁を綴っていきたくと思う。

一 東京国立博物館所蔵 土偶片について

東京上野にある東京国立博物館に、一つの土偶が所蔵



写真1 児島惟謙像と関西大学博物館

されている。頭部のみが残存するものであるが、まずこの土偶を紹介することから始めていきたい。

出土地は東京都品川区にある、明治一〇年（一八七七）にエドワード・シルベスタ・モース（以下、「モース」と表記）が発掘したことで有名な大森貝塚である。土偶は、写真2に示したように、最大長五・七cm、横幅五・二cmほどを測る頭部の破片である（写真2）。図1にも示したようにほぼ円形を呈しており、裏面に剥離痕を残すことから胴体は別部材で作製されていたものと考えられる。厚さは最大で一・五cmほどであり、縄文時代後期の特徴を示す土偶である。眉から鼻梁にかけては少し盛り上がり上っており、眉隆起した縄文時代人の特徴を示しているともいえる。

目・鼻・口とも刺突で成形されているが、いずれも竹ひご状の工具を用いたと思われる、目は両眼とも鼻から目尻にかけてほぼ真横に引っ搔くようにして刻んでいる。鼻腔はおそらく同じ竹ひご状の工具を下から上方へ突き刺すようにして表現し、口は棒状工具を突き刺して回転させることによって口径を大きくし、結果的に口を開い

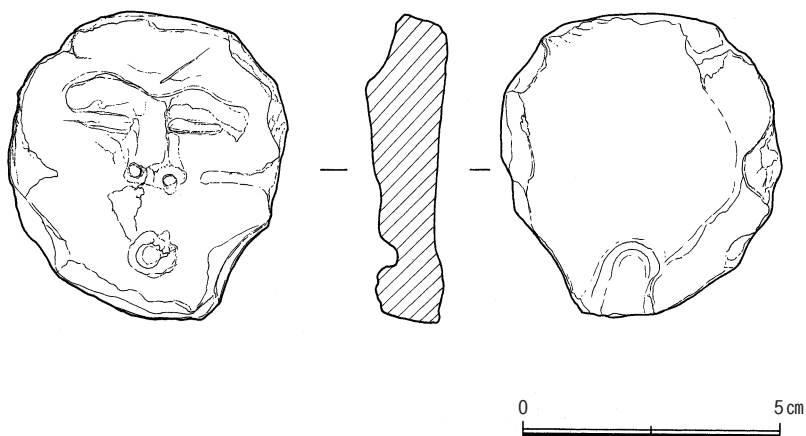


図1 大森貝塚採集 土偶片（児島惟謙寄贈：東京国立博物館所蔵）



写真2 大森貝塚出土土偶片

たような表現となっている。顔の表面は指でなでつけるように整形した痕跡が観察できるものの、朱塗りなどは確認できない。表面の色調は茶褐色を呈し、裏面は剥離部分が黒班状になっている。焼成はこの時期の土器と同程度であり良好とみてよく、胎土も精良である。

縄文時代の土偶についてはいくつかの型式があり、用途についても様々に議論されるが、縄文時代人の精神生活を表徴する遺物であることはまちがいない。そのなかで本品のように、縄文時代人の表情を読み取ることができる（土面をつけている可能性もあるので注意は必要だ

が) 個体は貴重である。

この遺物が収められていた箱には「明治三十八年 歴
史 會八三號 寄贈」のラベルが入れられており、後述
する本品の来歴が正しいことを証明してくれる。

さて、今回紹介した土偶の意義について触れておきた
い。大森貝塚の出土品については、近年遺跡公園として
整備が進められていくまでは、モースが調査した時に
出土した以外の遺物はあまり知られていなかった。そのた
めもあって大森貝塚出土土製品(土器を除く)について
は、遺物を再整理した際には次のように記述されている。

「大森貝塚から出土した土製品はなぜかバラエティ
ーが少ない。加曾利B式(安行式)では土偶の頂点で
もあるが、大森貝塚にはない。また、土製耳飾も同
様である。」^(三)

この記述については今回紹介したように、東京国立博
物館に所蔵されている遺物がある以上、事実誤認である
といわざるを得ない。しかしながらたしかにモースが発
掘した資料の中に、土偶を含めた土製品が少ないことは
事実である。モースの報告には土偶としては掲載されて

いないが、現在この時の出土品を所蔵している東京大学
総合博物館では、モースが刊行した報告書図版14-14に
掲載された破片がハート型土偶の下肢部であると報告し
ている。^(三) ちなみにこの遺物に対するモースの記載は「実
大。赤みをおびた明るい煉瓦色。非常に粗い作り。三つ
の面に同様に沈線がある。明らかに把手」とある。^(三)

このように見えてくると、今回紹介した土偶の意義とい
うものが自ずと明らかになってくると考えられる。すな
わち大森貝塚において土製品の出土量が少ないことは事
実であり、そのなかで本品のように明らかに土偶として
の形状を保ち、表情さえも窺うことのできる資料は大森
貝塚に生活した人々の精神活動を考えていく上で重要な
位置を占めるといえる。

以上、大森貝塚出土の土偶を紹介してきたが、本品が
東京国立博物館へ納められた経緯を明らかにしていく必
要がある。来歴を知る手がかりとして東京国立博物館か
ら刊行されている収蔵品目録を見ると、この土偶は明治
三十八年(一九〇五)に、児島翁から寄贈されたものであ
ることを知ることができる。^(四) すなわち関西大学創設者の

一人である児島翁と、考古学発祥の地大森貝塚の接点が見えてくる。児島翁が土偶を寄贈した経緯については次章で詳述することとして、本章の最後に、この土偶と同時に児島翁によって博物館に収められた石棒についても紹介しておきたい。

石棒とは縄文時代に用いられた石器の一種であるが、その用途を正確に知ることはできない。ただ、男性性器を想起させるような形状から、子孫繁栄を祈念する縄文時代人の精神生活を考えていく上で重視される遺物である。

大森貝塚出土の石棒は図2に示したように、現存長八・二三cm、最大幅二・六cm、最大厚一・四五cmを測る。途中で折損しているため全形は不明であるが、石棒であることはまちがいない。現状の根元付近では断面隅丸菱形を呈し、先端にいくにつれて断面は楕円形状を呈するようになる。石質は砂岩系統と思われる、全体に丁寧に研磨されている。

この石棒の裏面（現状での）には「明治三十八年 歴史 會八五號 寄贈」とのラベルが添付されており、先

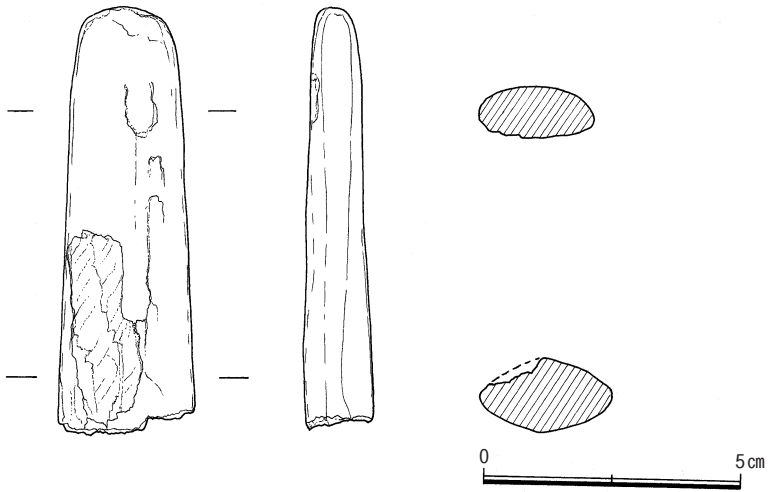


図2 大森貝塚採集 石棒片（児島惟謙寄贈：東京国立博物館所蔵）

の土偶と同時期に整理されたことがわかる。

石器についてのモースの報告を見てみると、本品と同様の石棒が掲載されている（報告書図版17―7）。石質は「滑石質の板岩」と記述しており、遺物の解説として「にぶく平滑に終わる一方の端部に、二個の溝を横方向につけている」と記されている。^五断面形状は今回紹介したものと同様の隅丸菱形を呈しており、両者の類似性を窺うことができる。残念ながらこの報告書に掲載されている個体を実見する機会がないので、同一個体であるか否か、また同質の石材が使用されているかどうかについては未確認である。

大森貝塚の出土品のうち石器についても、土器と比べるとその量は少ないといつてよい。石棒については土偶と違ってモースの報告書にも同種の遺物が掲載されているものではあるが、今回紹介した石棒もその一端につながる資料であるといえよう。

以上、大森貝塚から出土し、児島翁によって寄贈された土偶と石棒を紹介したが、これらの遺物が一〇〇年を経てもその価値を保った遺物であることが理解できる。

二 児島邸と大森貝塚

これまでに児島翁によって寄贈された土偶・石棒を紹介してきたが、本章ではなぜ翁が土偶を寄贈するに至ったかという経緯を明らかにしていきたい。そのためまず、翁の略歴を見ていくことしよう。^六

児島翁は、天保八年（一八三七）に現在の愛媛県宇和島に生まれている。生家の身分はけっこう高いものではなく下級藩士といえるが、幕末には脱藩し勤王運動に身を投じる。明治維新以後、程なくして司法省に出仕し（明治四年）、以降法曹界の道を邁進する。関西大学の創立に関わった時には、大阪控訴院長として在阪していた壮年時代のことである。その後、明治二四年（一八九二）に大審院長となり、直後にいわゆる大津事件が起きる。この大津事件に関し、児島翁が司法の独立を守ったことはつとに有名であり、翁の伝記の大半を占めるような事柄ではあるが、今回はあえて触れないでおこう。児島翁は大津事件への裁判に決着をつけた後、翌二五年には大審院長を辞任する。

ここまでがいわば翁の司法官時代であるが、この後は政界へと身を転じることとなる。すなわち明治二十七年には貴族院議員となり、明治三十一年には愛媛県六区から衆議院に立候補し当選する。同年の衆議院解散後の選挙でも再び当選し、明治三五年の満期まで議員を務めることとなる。さらに、明治三八年には再び貴族院議員に就任し、明治四十一年に亡くなるまでその職にとどまった。

さてこのような生涯の中で、先の土偶を寄贈した明治三八年の事跡を再度確認しておきたい。この年に貴族院議員に就任していることは述べたが、もう一つ左記のところへ転居していることが明らかにされている。その住所とは、次の通りである。

「東京府荏原郡大井村二千九百五十五番地」

この住所にピンと来る方は少ないと思うが、この場所は明治一〇年にモースの発掘した大森貝塚の所在地に相違ない。正確には隣接する地番ということになるが、モースが発掘するにあたって、発掘場所の地主「櫻井甚右衛門」にあてた補償費の支払いを示す書類の中にはっきりとその場所が「荏原郡大井村二千九百六十番地」であ

ることが記されている。⁽⁷⁾ この「二千九百五十五番地」と「二千九百六十番地」の関係を示す図面が、写真3に示したとおり現在品川区立歴史博物館に収蔵されている地籍図である。⁽⁸⁾ この図からも明らかのように、モースの発掘した箇所は線路敷きに接する三角形の土地であり、発掘から約三〇年を経てこの場所も含めて、児島翁の屋敷地になっていたことがわかる。すなわち先の土偶片は、児島翁が屋敷地を整地するか、もしくは邸宅の建築にあたった際に発見し、それを東京国立博物館に寄贈したものであると考えられる。

モースが発掘してから約三〇年後、大森貝塚の上に児島翁が居住し、その邸内で発見した土偶他を東京国立博物館に寄贈したというのがこの顛末である。

モースの発掘については、発掘から一〇〇年を記念する事業として昭和五二年に研究成果が再評価され、その過程で先に示した発掘地の保証費を記した文書が発見された。⁽⁹⁾ また、モースの考古学的な側面だけでなく、彼の収集した民俗資料の再評価など多方面から研究が進められている。⁽¹⁰⁾

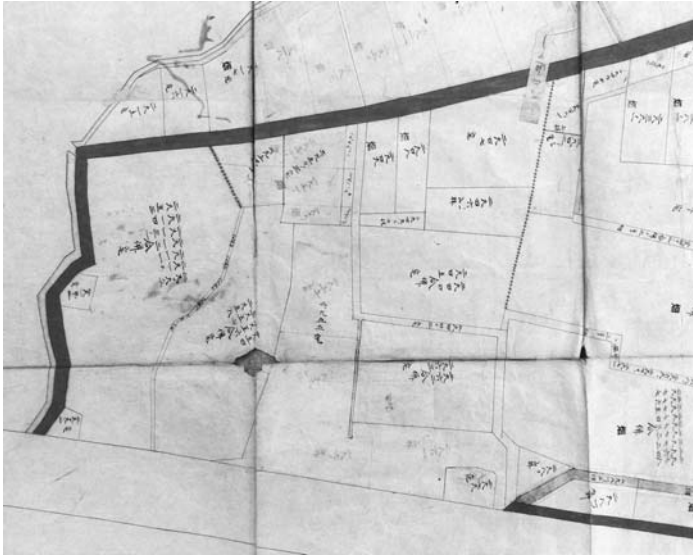


写真3 児島惟謙邸地籍図（明治40年ころ）

このようにモースの全体像が再評価される中で、大森貝塚と神田孝平、本山彦一両氏の関わりについて触れておこう。両氏は改めていうまでもなく現在の関西大学博物館の中核をなす資料の収集者であり、この両氏とわが国における考古学調査の劈頭を飾る大森貝塚との関係を記しておきたい。

まず、神田孝平と大森貝塚の関係について見ていこう。モースが神田といつから面識を持ったかについては明らかではない。しかし発掘調査から二年後に出版された大森貝塚の報告書の序文において、関係者への謝辞を記した部分の筆頭に「KANADA（神田）」の名前が記されており、この「神田」が「孝平」であることは間違いない⁽¹⁾。この時神田孝平は文部少輔を務めており、東京大学のお雇い教員であるモースと面識があることは自然であるが、単に官僚と外国人教員としてではなく「考古学」という学問の研究者としてお互いに有益な会話を交わしたことが想像できる。

そして神田は大森貝塚の出土品を明治天皇への天覧を上申し、実現する。先に示した櫻井甚右衛門が所有する

「二千九百六十番地」の発掘調査は、モースの手がけた四回目の発掘調査であるが、この発掘のおこなわれた明治一〇年一月にはモースは一時帰国しており、現場作業は教え子の松浦佐用彦と佐々木忠次郎を中心として実施されたことが明らかとなっている。そしてこの発掘から一ヶ月もたたない同年一二月一四日付けで神田は太政大臣三条実美宛に「府下大森ニ於テ発見ノ古物供天覧度該品九函并目錄筆記共二通呈進候条該品九函ハ経覽後回下相成候様致度此段上申候成」との上申書を提出する。

そして九箱に収められた大森貝塚出土品の目録が発掘に参加した松浦・佐々木によって作成され、添付されている。さらに上申書に「筆記」とある『大森村古物発見ノ概記』が伴っている。この『概記』は「考古学ノ世ニ明ラカナラザルヤ久シ……（以下、省略）。」という書き出しで始められており、この文頭で「考古学」という文字が使用されている。これが「Archaeology」の訳語を当てるにあたって、「考古学」という用語が使用された初例とされている。⁽¹¹⁾「上申書」・『概記』とも文部大輔田中不二磨の名によって提出されているが、この時期田中は

外遊に出ており、実質文部行政のトップとして指揮をしていたのが神田であって、天覧を計画したその実質的な責任者は神田であるといつて間違いない。

こうして神田の上申から一週間足らずの一二月二〇日午前中に、天覧が実現する。この様子は『明治天皇記』に記されているが、その中に「近世考古学の研究はれより隆なり」とある。⁽¹²⁾このように神田はモースの発掘した成果をいち早く明治天皇に供覧することによって、誕生したばかりの「考古学」という学問が発展していくことを意図したのであろう。もちろん神田の個人的な興味を働いたことも事実であろうが、モースと神田との信頼関係が強固であったこと（なぜなら、モースの一時帰国中に実施しているのであるから）を物語っているのではなからうか。いずれにせよ、わが国で初めて実施された発掘調査の成果が、発掘からわずか数ヶ月後に天覧の機会に恵まれたことは、神田の努力によるものであったといえる。ただ、実際のところ明治天皇がいかなる感想を持ったかについては明らかでなく、「考古学」が学問として成立するには、今しばらくの時間が必要であったこと

も事実である。

次に、本山彦一と大森貝塚との関連を見ていきたい。

この話はモースの発掘から五〇年あまりが過ぎ、さらにはモースが逝去した後の話である。

モースは明治一一年四月に再来日し、その後明治一二年八月三十一日に東京大学の教授としての契約期間を満了するまで滞在した。しかし契約期間を延長することなく帰国し、その後、明治一五年六月五日に日本美術を愛玩したアメリカの富豪ウィリアム・ビゲロウの案内役として再来日する。そして、ビゲロウの日本美術品収集に大いに協力することとなった。しかしながらこの滞在は翌年の二月までのほぼ半年間であったが、この間は特に考古学的な活動はしていないようである。モースの日本滞在校期间は、すべてを通算しても二年半足らずである。しかしモースは日本への興味を失っていないかっただけであり、地元セーラムのピーボディ博物館館長として日本の民俗学・陶器・家屋などの収集・整理・研究を続けている（写真4）。そして関東大震災によって東京大学の蔵書の多くが失われたことを知ると、自分の全所蔵図書の



写真4 現在のピーボディ・エセックス博物館

寄贈を約束し、彼の逝去後実現された。実際、東京大学図書館に残される書物の中には、次のような記述が認められる図書に遭遇することがある¹⁴⁾。

「EXLIBRIS Edward S. Morse (1835-1925)
professor of Biology Tokyo Imperial University
(1877-1879) Given by his will By his daughter
Mrs.Edith Morrss Robbj」

終生日本を愛する気持ちは変わらなかったモースであるが、大正一四年二月二〇日に八七歳で逝去する(写真5)。モースの訃報に接した国内においては、様々な顕彰の活動が開始される。その一つが、大森貝塚に顕彰の碑を建立することであった。そしてこの顕彰碑が相次いで二基建立されたことから、大森貝塚の場所をめぐる混乱が始まることとなる。

二基あるうちの一つは「大森貝塚碑(以下、「貝塚碑」とする。)」であり、この碑の建立発起人が、本山彦一である。建立された場所はモースの発掘した「二千九百六十番地」の一角であり、現在の住所は「品川区大井六丁目二一番」である。「貝塚碑」は写真6にも示したように、

中央に深鉢形土器を乗せたユニークな形をしているが、これは凶案家でもあり原始工芸・アイヌ工芸の研究者として活躍する杉山寿栄男によってデザインされたものである。そしてモデルとなった土器は、モースの刊行した報告書の図版1-9に掲載されているものであることが知られている。この碑は昭和四年の五月二六日に起工し、同年一月三日に竣工式が行われている。

この場所に設置する経緯については明らかではないが、本山と両輪となってこの碑の建立に奔走した公爵大山柏は、後日この碑の近くで発掘調査を実施しており、この

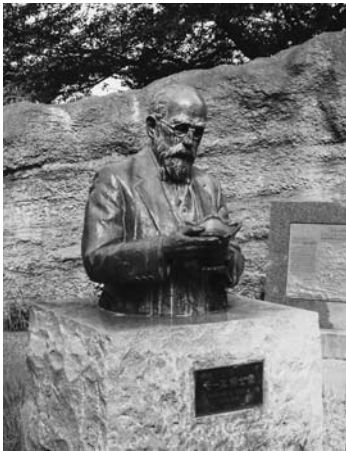


写真5 モース晩年の胸像
(於：大森貝塚遺跡庭園)



写真6 大森貝塚碑



写真7 大森貝塚碑

場所がまさにモースの発掘した大森貝塚に違いないとの確証を得ていたのである^(二五)。もう一つの碑は、現在の大田区山王一丁目三番に存在するものであり、この碑はモースとともに発掘調査に参加した佐々木忠次郎が中心となつて建立したものである(写真7)。こちらは碑面に「大森貝塚」とあることから「貝塚碑」と呼称されることが多い。佐々木は「貝塚碑」の賛成人として名前が刻まれているにもかかわらず、貝塚碑の建立からわずか五ヶ月後の昭和五年四月にこの碑を建立することになる。佐々木はモースと一緒に発掘調査に立ち会った人物であつて、この時唯一の生存者であることから、彼が特定したこの

場所こそが大森貝塚の地であることを強調することにもなった。実際、「貝塚碑」・「貝墟碑」の両方に「石川千代松」・「小金井良精」の名前が刻まれており、これらの顕彰碑がほぼ同時に、また同じようなメンバーで建立されたことがわかる。佐々木は、モースの計報に接したとすぐに碑の建立に動き出し、発掘した場所を特定したことになるが、発掘から五〇年以上を過ぎていただけに正確な位置を特定することが難しかったともいえる。

結局二つの碑が相次いで建てられたことから、先述した「補償費」の公文書が見つかるまでの約五〇年間にわたって、モースの発掘した大森貝塚の場所をめぐる混乱が生じることになる。現在はこの文書とそれぞれの碑の周辺を発掘調査した結果、「貝塚碑」の所在地がモースの発掘した場所であることが確定している¹²⁶。しかしながら両方の碑が存在する場所がともに昭和三〇年に史跡に指定されてきており、現在では本家争いは一段落しているといったところであろう。

以上述べてきたように関西大学博物館資料の中核とな

っているコレクションを築いた神田孝平と本山彦一であるが、神田はまさに発掘の時点においてモースの発掘成果をいち早く天覧に供するなど、発掘のよき理解者であったといえよう。そして本山は発掘から五〇年を過ぎ、モースの没後に顕彰事業の中心となって大森貝塚との縁を持ったことになる。

三 江見水陰による大森貝塚の発掘

さて本章ではもう一度、大森貝塚の上に児島翁の邸宅があったときに戻って、この時代に実施された「発掘調査」に言及していきたい。そして明治三〇年代の考古学界を振り返りながら学史的な位置付けを試みたい。

児島翁は先述したように明治三八年一二月に同地に転居し、同四一年七月に逝去しているため、実質二年ほどしか暮らしていなかったが、この地では「大森倶楽部」と名付けた会を設立し、その初代委員長として地元との交流も大いに振興したようである。児島邸の電話番号が「大森局 壹番」であったことから、翁が地元でも積極的に地域との交流を図っていたことが窺える。

この時、翁の邸宅内をモースの発掘した大森貝塚であることを認識して発掘調査をした人物がいる。その人の名を「江見水陰」という。

本名は「江見忠功（ただかつ）」といい、明治二年（一八六九）に岡山市で生まれ、昭和九年（一九三四）に松山市で客死した。享年六六歳である。彼の名前は考古学界でも知られてはいるが、むしろ明治時代の文壇界で活躍した人物である。彼自身考古学に対する自分の立場を「学界の高等土方を以て任じ」というように、考古学については「アマチュア」という立場を堅持した。もちろん彼が考古学で名を馳せた明治三〇年代後半において、考古学を職業としていた人物はごくわずかであろうから、なにをもって考古学の「プロ」「アマチュア」を区別するかは難しいのであるが、文才を活かして彼自身が体験した発掘調査を題材に「考古小説」という分野を切り開いた人物といえる。彼の著作のうち、『地底探検記』『地中の秘密』『考古小説 三千年前』の三冊が考古三部作として知られている。

江見水陰の人物論、あるいは彼の考古学界における役

割・業績などは先学の研究によることとし、彼の著作の中から大森貝塚の発掘に関する部分を見ていきたい。

大森貝塚の発掘に関しては、『地中の秘密』（写真8）に「大森貝塚の発掘」と題された一文が掲載されている。

その冒頭は「大森の貝塚は、人類学研究者の眼から、最も神聖なる地として尊敬せられて居る」から始まる。そして重要なことは、モースがこの地を発掘したことを記し（ただし発掘した年を明治一二年と誤解しているが）、現在この場所は児島惟謙邸になっていると明記していることである。すなわちモースの発掘から三〇年ほどを経



写真8 江見水陰『地中の秘密』

た時点では、彼が発掘した大森貝塚の位置というのは明確であったわけであり、先述したように昭和初期に記念碑が二基建立されたような混乱はこの時点では起きていなかったことがわかる。

さて、江見水陰の記述にしたがって、発掘の経緯を見ていこう。そもそも児島翁の屋敷地を発掘することが可能になった理由として、この時朝日新聞社に勤めていた杉村広太郎（号は楚人冠…明治五年（一八七二）和歌山市生まれ、昭和二〇年（一九四五）没。）が、児島翁、もしくは子息と交流があり、杉村と同じく朝日新聞に勤めていた水谷幻花の元へ発掘の話が持ち込まれたことが記されている。すなわち、翁自身も自邸が大森貝塚の上にあることは認識していたものと思われ、それゆえ採集した遺物を重要だと判断し、東京国立博物館に寄贈したものである。江見水陰とともに発掘を実施した水谷幻花（本名乙次郎…慶応元年（一八六五）東京深川生まれ、昭和一八年（一九四三）没。）は、そもそも江見を考古学の世界に引き込んだ人物であり、一歩先に東京人類学会に入会しており、いってみれば江見の先輩であり、よ

き理解者であり、いざ発掘調査の場所にあつては遺物採集のライバルともなった人物である。

このように江見水陰と水谷幻花によって企画された大森貝塚の発掘調査は、明治四一（一九〇八）年一月二一日（火曜日）に実施された。二人は朝九時に児島邸を訪問し、翁は不在であったが（熱海において病氣療養中、この年の七月に逝去。）令息が対応し、さらには発掘人夫も二名用意していたという。この時対応した令息とは、長男正一郎は明治三三年北清事変で戦死していることから、次男の富雄、もしくは三男俊之助であるとおもわれる。この江見の記述によれば昼食を提供し茶菓を出すなど、児島家もこの発掘調査には非常に協力的であったことが窺える。

発掘の開始にあたっては「土器はモー留守であつた（「モールス」は、「モース」の明治時代の呼称）」というような冗談を交えながら意気揚々と始まったようであるが、最初の発掘場所ではそれほど遺物は出土せず、邸内において発掘箇所を変更したことが記されている。このことを近年の史跡整備にあわせた発掘調査の結果と照らし合

わけて考えると、最初の発掘場所は線路脇のB地点と呼称しているところであり、後者がA地点と呼ばれるところだと思われる。

引き続き発掘はおこなわれたが、遺物の出土状況は相変わらず不調であったようであり、発掘に立ち会った杉村広太郎にはさんざんからかわれたと記してある。このように発掘調査は続けられていくが、そこへ二条基弘公爵（安政六年（一八五九）九条尚忠の八男として誕生、昭和三年（一九二八）没。）が発掘に加わっている。二条公爵家とは五撰家のひとつであり、この時基弘は貴族院議員を務めている。この人物はケンブリッジ大学に留学し、その頃から考古学・人類学に興味を持ち東京人類学会に入会するとともに、華族人類学会を組織するなど積極的に活動したことで知られる。そして「銅駝坊陳列館（正式名称・二條家人類学標本陳列所）」と名付けた日本で最初の個人博物館を設立する。この二条公爵の収集品は徳川頼貞に引き継がれて、その後東京国立博物館に寄贈されている。

三人は昼食を挟んで午後まで発掘を続けたが、彼らを

満足させる遺物は出土しなかったようである。しかしながら「何も出ないでも好（い）いです。大森の貝塚を一畝でも堀つたといふ事が、既に誇るに足るのですから」となかば負け惜しみ、半分は本音をもらしている。そして午後三時頃には、坪井正五郎東京大学教授が現地を訪れている。坪井については改めて記述するまでもないが、東京大学理学部においてわが国で初めての人類学教室を主宰した人物である。さらには東京人類学会の創立にも関わり、明治二九年には神田孝平に引き続いて会長職に就任し、学会で訪れていたロシアで客死するまで日本の人類学・考古学をリードした人物である。モースを評して「日本考古学の父」と呼ぶことがあるが、わが国に人類学・考古学を学問として普及させた人物はむしろ坪井正五郎であるといったほうが正しいのではなからうか。

坪井の業績については別の機会に譲るとして、改めて江見水陰と水谷幻花が主催した大森貝塚の発掘調査を見てみると、この時期に日本における考古学をアカデミックな面から牽引する坪井と華族の最高位に立つ公爵が参加し、そこへアマチュア考古学を自任する兩名が加わっ

ていることがわかる。発掘のほうは、夕方四時頃には終了したようである。その後、坪井・水谷とともに江見が自宅に開設していた「太古遺物陳列所」に立ち寄って、その日の日程を終えている。

このような発掘調査は、近隣の遺跡において江見が考古学に熱中していた明治三六年から四一年にかけて、結構頻繁に実施されていたようである。そして参加するメンバーもほぼ同じ顔ぶれであったことが知られている。本章のまとめとしてこの時代の考古学界の状況について触れておくこととしよう。

今回紹介した江見・水谷が実施した発掘は「考古学Ⅱ宝探し」的な側面が強いことは否めない。層位的に発掘することはなく、貝層をみつめてひたすらそれを追いかけて、その中に包含する遺物を取り出すということが、彼らのおこなった「発掘」である。『地中の秘密』に綴られた江見の報告は、まさにこの時代の発掘というものの実態を彷彿とさせるものである。

このような遺物採集を目的とした発掘を、宝探しのだと批判することはたやすい。しかしながら、明治二六年

に坪井によって初めて東京大学に人類学教室が設置されたという時代背景を考慮すれば頭ごなしに否定することは正しい態度とはいえないであろう。むしろ、遺跡というものを認識し、遺物を保存したことを評価すべきである。この遺物の採集ということを法律的な側面から見てみると、このころには今日という考古遺物を土中から発見した場合には、明治三二年七月に公布された法律第八七号の「遺失物法」が適用されることとなった。そしてこの法律の「訓第九八五号」には、次のように定められている。

「遺失物法第一三条ニ依リ學術技芸若ハ考古ノ資料ト為ルヘキ埋藏物ヲ発見シタルトキハ其ノ品質形状發掘ノ年月日場所及口碑等徵証トナルヘキ事項ヲ詳記シ模写図ヲ添ヘ左ノ區別ニ從ヒ之ヲ通知スヘシ

- 一 古墳関係品其ノ他學術技芸若ハ考古ノ資料トナルヘキモノハ 宮内省
- 一 石器時代遺物ハ 東京帝国大学

このような条文が定められた背景を記しておく、古墳関係の遺物が宮内省に通知された理由は、未治定陵墓

の調査考証のために情報が集められたものである。この法律に従い宮内省に置かれていた諸陵寮には、各地の古墳からの出土品報告がもたらされた。実際には、陵墓の治定に至ることは多くなかったが、出土品のうち優品は宮内省によって買い上げられ、あるいは同じ宮内省の管轄下にあった現在の東京国立博物館に収蔵されるものもあった。一方で、今日でいう弥生時代以前の遺物については、坪井が主任教授を務めていた東京大学の人類学教室へ送付されることになっていったものであり、教室がこの時代に人類学（広い意味で「考古学」も内包するといえる）の研究を行っていた唯一の機関であることがわかる。

この条文が厳格に適用されたとするならば、江見水陰らの発掘が許されるのではなく、ましてや江見が自宅に私設博物館を開設して、発掘によって採取した遺物を展示するということは法律に反することになる。さらにはこの私設博物館を本来であれば遺物が送付されるべき機関を代表する東大教授がその場所を訪れ、様々な学問的な指導をすることは誠に奇妙な状況であるとしかしい

ようがない。しかしながらこのような状況こそが明治三〇年代の考古学という学問の実情であり、この黎明期にあつて坪井は厳格な法の適用よりも、むしろ遺物がどこに保管されているかを問わず資料が集積されることを重視したといえよう。

江見らが提供した情報や遺物は、この時期における考古学という学問の成長に幾ばくかの寄与をしたことは事実であろう。そして宝探的ではあつたが考古学を机上の学問とせず、自ら遺跡に足を運び、発掘を企画し、さらには自宅に展示施設を設けたことも、法的には問題があるのかも知れないが、学問の成長過程では必要なことであつたと総括しておきたい。そしてまた、彼の著作に魅了されて考古学の道を目指した若人がいたことも、彼の功績としてあげることができよう。

江見らのこのような活動も、彼の年譜を見る限りこの明治四一年の大森貝塚の調査以降はやや下火になつていくといえる。彼の考古三部作の最後を飾る『考古小説 三千年前』は大正六年（一九一七）に刊行されているが、この時期に江見が発掘を企画することはほとんどなかつ

たようである。さらには坪井が大正二年（一九一三）にロシアで客死し、その一方で、京都大学において浜田耕作（青陵）がわが国初の考古学教室を大正五年（一九一六）に開設するなど考古学は次の段階に進んでいく。そして江見らの活動は学史の一面としてのみ記憶されるようになっていくのである。

以上、大森貝塚の上に児島邸が位置しており、そしてその邸内で実施された江見水陰らの発掘について述べてきた。この発掘は明治四一年一月の肌寒い一日に実施されたものであり、特に重要な出土遺物が得られたわけでもなかった。しかし日本考古学の歴史を考える中で、モースの発掘から三〇年ぶりにわが国で初めて発掘調査がおこなわれた遺跡において実施された調査であり、またそこに関わった江見・水谷・二條・坪井らの活動は考古学史の中に記憶されておくべきものであろう。

おわりに

東京国立博物館に所蔵されている土偶の破片から、ここまで大森貝塚をめぐる考古学史を見てきた。大森貝塚

は明治一〇年にモースによって発掘調査が実施され、わが国における近代考古学発祥の地として小・中学校の教科書にも掲載される遺跡である。考古学を学ぶ者にとつても、遺跡の時代・内容を越えて記念碑的な場所であるといっても過言ではない。そしてこの場所に本学の創設に関与する児島翁が、その最後を迎えることとなる居室を構えていた事実を報告した。児島翁自身大森貝塚の上に居住していることを自覚していたことはまちがいないであろうし、それゆえ庭先で採集した土偶を東京国立博物館へ寄贈したものである。小稿で述べたように、この一〇〇年前に寄贈された考古遺物の重要性は、今日においても少しも減じるものではなく、大森貝塚を考えていく上で欠くことのできない遺物である。今、この地に児島翁が居住した痕跡はまったくなく、現在同地は大森貝塚の史跡公園として整備されている（写真9）。

関西大学考古学の歴史は、昭和二七年末永雅雄先生が教授としてご着任になった昭和二七年四月をその出発点としている。そしてまもなく本山彦一が収集してきた考古学コレクションが大学に移されることとなり、今日の



写真9 現在の大森貝塚（大森貝塚遺跡庭園）

関西大学博物館へと発展してきた。この本山コレクションの前身が、神田孝平の手元にあったことも知られている事実である。今回大森貝塚の発掘とモースの顕彰事業を通じて、奇しくも神田孝平、本山彦一という本学博物館の中核となるコレクションを築いてきた両氏の活動にも触れることとなった。関西大学で考古学を学んだ者にとって、考古学の象徴的な遺跡である大森貝塚との関連の中で「児島惟謙」・「神田孝平」・「本山彦一」の名を見つけることは、うれしさとともにやや誇らしげに感じたことは事実である。冒頭に記したとおり、先日関西大学博物館前に立つ児島翁の胸像をおもわず見つめた理由である。

児島翁は現在、終焉の地となった大森貝塚からそれほど近い品川区南品川五丁目にある海晏寺に眠っている（写真10）。先日、翁の一〇〇回忌をやや過ぎた夏の日、墓参に参上した。そして平成二〇年、一〇〇年を経て翁が寄贈した遺物の存在を知ったことと、翁が居住した以後の大森貝塚の状況、さらには関西大学における考古学研究の現状を報告した。



写真10 児島家墓所（於：海晏寺）

また平成二十二年は、筆者にとって関西大学で考古学を学び始めてから三〇年を迎えることなることを期に一層の精進を、霊前にて誓ったものである。了

註

- 一 東京都大田区市史編さん委員会『大田区史（資料編）考古Ⅱ』昭和五五年三月
 - 二 東京大学総合博物館データベース「人類先史縄文時代土偶・土製品データシート」
 - 三 エドワルド・S・モールズ『大森介墟古物篇』理学部会粹第一帙 上冊 東京大学法理学部 報告書 明治一二年
 - 四 現在この報告書の原本を見ることはきわめて難しいので、小稿では左記の複製版を利用した。
近藤義郎・佐原 真『大森貝塚 付関連資料』岩波文庫 青四三二一 一九八八年
東京国立博物館『収蔵品目録 考古 土俗 法隆寺 献納宝物』昭和三十三年三月
- ただし、本書では「児島惟謙」の名前を「児玉惟謙」

と誤記している。

また、東京国立博物館に所蔵されている土偶、石槌の閲覧調査にあたっては同館学芸研究部古谷毅氏にご高配賜った。記して感謝申し上げる次第である。

東京国立博物館『東京国立博物館図版目録 縄文遺物篇 土偶・土製品』平成八年三月二五日

五 近藤義郎・佐原 真『大森貝塚 付関連資料』岩波文庫 青四三二一 一九八八年

六 児島惟謙の年譜については、左記図書を参照した。

原田光三郎『護法の巨人 児島惟謙と其時代』（復刻版）伝記叢書二七九 大空社 一九九七年（初版は文光堂刊行 昭和一五年）

七 モースの発掘に係る公文書については、左記図書の巻末に翻刻されている。

品川区立歴史博物館『日本考古学は品川から始まった―大森貝塚と東京の貝塚―』二〇〇七年

八 地籍図の閲覧にあたっては、品川区立歴史博物館ならびに同館副館長柘植信行氏、学芸員塚越理恵子氏、同 富川武史氏にご高配賜った。記して感謝申し上げます次第である。

九 発掘地点を示す公文書の発見経緯については、左記論考に詳しい。

佐原 真「大森貝塚百年」『考古学研究』第二四巻 第三・四号 一九七七年

佐原 真「日本近代考古学の始まるころ（モース、シーボルト、佐々木忠二郎資料に寄せて）」

守屋 毅編 共同研究『モースと日本』小学館 一九八八年

一〇 モースの総合的な研究としては、左記の図書がある。

守屋 毅編共同研究『モースと日本』小学館 一九八八年

一一 近藤義郎・佐原 真『大森貝塚 付関連資料』岩波文庫 青四三二一 一九八八年

一二 「考古学」という用語の初出については、左記の論考がある。

金関 恕「世界の考古学と日本の考古学」『岩波講座 日本考古学一 研究の方法』岩波書店 一九八五年

邊見 端「訳語「考古学」の成立」『日本歴史』第一四五七号 吉川弘文館 一九八六年

一三 宮内庁『明治天皇紀』第四 吉川弘文館 昭和四五
年

一四 モースから寄贈された図書として、左記の図書を紹
介したことがある。

H・V・シーボルト『Notes on Japanese Archae-
ology — with Especial Reference to the stone Age
—』(日本語訳『日本考古学覚書』)

徳田誠志「H・V・シーボルトと関西大学博物館所
蔵資料——日本考古学黎明期の一断面——」『関西大
学博物館紀要』第九号 平成一五年三月

一五 大山柏の実施した発掘調査については、左記の報告
がある。

清水潤三「大森貝塚の発掘」『考古学研究』第二四
巻 第三・四号 一九七七年

一六 近年の発掘調査としては、左記の報告書が刊行され
ている。

品川区遺跡調査会『大森貝塚 平成五年度範囲確認
発掘調査概報』品川区教育委員会 平成六年

一七 江見水陰については、左記の図書、論考を参照した。
杉山荘平「江見水陰論」『縄文文化の研究』第一〇

補記

一八 江見水陰『地中の秘密』博文館 明治四二年

巻 縄文時代研究史 雄山閣出版 一九八四年
斎藤 忠「江見水陰」『考古学史の人々』第一書房
昭和六〇年
杉山博久『魔道に魅入られた男たち 揺籃期の考古
学界』雄山閣出版 一九九九年
斎藤 忠編『江見水陰 『地底探検記』の世界解説・
研究編』雄山閣出版 二〇〇一年

一 「東京国立博物館」「東京大学」「京都大学」は、時
期によって名称が変遷するが、小稿では煩雑になる
ので標記の名称で基本的に統一した。

二 小稿に掲載した写真のうち「写真2」は東京国立博
物館、「写真3」「写真8」については品川区立歴史
博物館より掲載許可を受けたものである。その他は
すべて筆者が撮影したものである。

(とくだ まさし 宮内庁書陵部首席研究官)